



撮影：山田新治郎(表紙、並びに当ページ)、撮影協力：山形市教育委員会

旧済生館本館

山形県山形市霞城町

山形の県都にしんしんと雪が降り積む。JR山形駅から一〇分ほど歩くと、雪影に淡いオレンジ色の木造建築物が視界に入る。一八七八(明治十一)年設立の県立病院、現在は山形市郷土館として公開されている旧済生館本館だ。「霞ヶ城」とも呼ばれる山形城の旧三の丸大手口にあったものを、一九六九(昭和四十四)年に七〇〇坪ほど離れた霞城公園内に移築した国指定の重要文化財である。

初代山形県令の三島通庸みつまつは文明開化の象徴として県内に県庁や師範学校などの近代的な建築物を次々と整備した。県立病院済生館はその一つだ。設計は県職員の間井明俊。大工棟梁の原口祐之の采配のもと約三〇〇名の職人によってわずか七カ月で竣工した。擬洋風建築の名作として世に知られ、「三層楼」の愛称で親しまれてきた。病院の運営はお雇い外国人医師ローレッツが指揮を執り医学学校も併設、山形の医療・医学の中心的存在となっていた。三島は県内各地でインフラ整備を進めたため、「土木県令」の異名がある一方、市民にも厳格な労役や税を課したことから「鬼県令」とも呼ばれた。

この郷土館を預かる市教育委員会の武田祐子主任は「当時の市民は大変だったでしょうけど、その施策が現在の山形に結実していることは確かでしょう」と話す。「雪景色はもちろん、春は桜、秋には錦秋を背景に、それは美しく映える建物です。昨春はコロナ禍で閉鎖され、常駐する職員で桜景色を独占することになってしまいましたけど」と少し残念そうに微笑んだ。和洋折衷の擬洋風建築にはどこかコミカルな印象があったが、この旧済生館本館の凛とした佇まいからは優雅ささえ漂ってきた。

旧済生館本館の正面は3層からなる楼閣。1層目は八角形で吹き放しの石敷きのベランダがある。2層目の16角形の広間にはドーム型の大屋根、その上の3層目に八角形の小部屋があり、それぞれの階に広めのベランダが設けられている。その背後には中庭を囲む14角形のドーナツ状の回廊があり、これに沿って診療室が配置されていた。螺旋階段などの内観もユニークだ。現在、診療室はテーマごとの展示室になっている。

